令和４年度学校経営計画に対する中間評価報告書

石川県立七尾高等学校

１　豊かな人間性と国際性の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・学校行事、生徒会活動や部活動等あらゆる活動を通して、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦し、課題解決ができる力を育成する。	・生徒一人ひとりが一日一善の精神で、他者に対して小さなボランティアを行う。 ・各部ボランティア活動「校内」「地域貢献」（随時）	【成果指標】（生徒） 一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを実感できる。	一日一善運動や校内・地域貢献ボランティアを通して、「感謝・思いやり・協力」の心が育ったことを「実感できる」・「やや実感できる」と答える生徒の割合の合計が Ａ　８５％以上 Ｂ　７５％以上 Ｃ　６５％以上 Ｄ　６５％未満	【７月実施学校評価アンケート】 〈生徒〉 ７５％以上 Ｂ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】前期の各部活動で取り組むボランティア活動を一通り終えた。昨年度より数値は１．３％下がった。昨年度後期から生徒達で創意工夫をし、考えて取り組むボランティア活動を行っているが、その取り組み内容に深みが増してきたように感じる。 【今後の対応】後期も引き続き実施をしていくが、ボランティア活動に取り組んだ後の振り返りを玄関に掲示するなどし、主体的にその成果を感じられるようにしていきたい。
・異文化を理解しながら、ふるさとに愛着と誇りを持ち、グローバル、ローカルそれぞれの視点で社会に貢献する資質と態度を育成する。	・「能登の里山里海」特別講座（１年） ・令和４年度ふるさとに学ぶクリエイティブ人材育成事業（２年）	【成果指標】（生徒） 「ふるさとの良さを知り、ふるさとに対する誇りと愛着を実感できている」と評価した生徒の割合が高まっている。	４月に比べると、ふるさとの文化、産業、地域で活躍する人達を知り、ふるさとに誇りと愛着を「実感できた」・「やや実感できた」と答える生徒の割合の合計が Ａ　８０％以上 Ｂ　７５％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 〈生徒〉 ７０％以上 Ｃ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】１年生を中心に昨年度より大幅に数字を伸ばせたが、２年生の数値の伸びが少なかった。 【改善策】１年生が遠足での事前学習や全員対象の講演会などを通してふるさと理解を進めたように、２年生にも全員対象の講演を行ったり、ふるさと能登に関する調べ学習を行うなどして地元への愛着をより定着させたい。
	・異文化交流 ・外務省高校生講座	【成果指標】（生徒） 「異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が湧いた」と評価した生徒の割合が高まっている。	４月に比べると、異文化について理解し、さらに学びたいという意欲が「湧いた」・「やや湧いた」と答える生徒の割合の合計が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 〈生徒〉 ７０％以上 Ｂ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】昨年度よりも５ポイントほど数値が改善された。対面形式の講演会や交流が昨年度よりも増えたためであると考えられる。 【今後の対応】今後も青年海外協力隊の方からの講演や留学生との交流があるため、それらを活かし、より一層異文化理解を進めていきたい。

学校関係者評価委員の評価	ボランティアや生徒会活動など生徒が活発に活動している様子がうかがえる。３年生がリーダーシップを発揮しているものと思うが、１、２年生も自ら企画できる力を身に付けさせてほしい。
評価結果を踏まえた今後の改善方策	生徒会を中心に、生徒の主体性を大切にした活動を推進していきたい。

２　進路志望実現のための学力の形成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・基礎学力の定着を着実に進めるとともに、探究型学習を推進して困難な課題と向き合い考え抜く、粘り強い思考力を育成する。 ・生徒の可能性を最大限に引き出し、大学入試制度の変化にも対応できる進路指導を実践する。	・志を貫くためのキャリア教育 ・キャリア教育講演会 ・全国模試の校内採点による早期弱点指導の徹底 ・学習時間調査 ・ホーム担任、教科担当者、部顧問による個人面談 ・進路情報の発信 ・進路講演会 ・難関大学入試問題解法研究 ・金沢大学入試問題解法研究 ・習熟度別学習指導（週末課題） ・スーパー難関大学と難関大学別の講座や個別添削指導 ・金沢大学による出張講座 ・保護者への進路説明会 ・学習計画の作成とチェック ・志望校群別検討会（２年） ・志望校検討会（３年） ・出願校検討会（３年） ・志望理由書の作成（１・２年） ・批判的思考力育成 ・放課後学習会	【成果指標】 （生徒学年別） 第１志望に対して明確な理由がある。	高校卒業後について自分の言葉で語ることができると答えた生徒の割合が各学年目標に対して Ａ　１００％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　８０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 ＜生徒：１年生＞ ８０％未満　Ｃ ＜生徒：２年生＞ ８０％未満　Ｃ ＜生徒：３年生＞ ８０％未満　Ｃ	【判断基準】各学年目標 １年１２０人（６割） ２年１４０人（７割） ３年１６０人（８割） Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】前年度同時期同学年の数値と比較して、増加しているのは１年生のみである。具体的に生徒に語らせる活動を積極的に行っていることが奏功している。多くの生徒は志望校や将来に対する希望を持ってはいるが、それを自分の言葉で表現できていない。また将来のビジョンが志望校選定にとどまっている生徒も多いと思われる。 【改善策】「何になりたいか」だけでなく「どう生きたいか」「どう在りたいか」を生徒自身に考えさせる活動を各学年で進めるとともに、生徒に語らせるだけではなく、互いに語り合わせることで、生徒の気づきを促し、主体的に考えさせ、それを成長につなげられるよう支援する。
		【成果指標】 （１年生生徒） 学習習慣を身につけ、学力を向上させている。	（進研模試７月と１月の３教科総合偏差値の比較） 入学後、学力を伸ばした生徒が Ａ　１６０人以上 Ｂ　１３０人以上 Ｃ　１３０人未満	【４月スタディーサポートから７月進研模試で３教科総合偏差値を伸ばした生徒】 ＜生徒：１年生＞ １６０人以上 Ａ	【判断基準】１月の模試結果で判定する。 Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】多くの生徒が偏差値を伸ばしているといえるが、ＧＴＺでは伸びが少ない。ＧＴＺを伸ばした層はスタサポ時点でＢランクの生徒である。 【今後の対応】授業の予習・復習、小テストなど、やって当たり前のことをしっかりさせる。そのために学年全体で Classi の学習時間入力などもきちんとさせる。また、生徒の進路意識を高め、学習に対しての意欲向上を図る。
		【成果指標】 （１年生生徒） 着実に学力を向上させている。 （進研模試１月）	１月進研模試での学力到達度（ＧＴＺ）のＳランクの生徒が Ａ　３５人以上 Ｂ　２５人以上 Ｃ　２５人未満	【７月進研模試３教科総合での学力到達度（ＧＴＺ）】 ＜生徒：１年生＞ ２５人未満 Ｃ	【判断基準】１月の模試結果で判定する。 Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】スタサポ時から変わらず、Ｓ層は非常に薄い。校内で上位の生徒の中にも、３教科のうち、１教科は思考力を問う問題が解けない生徒が多く、バランス型の生徒には確実に得点できるものがないという状態である。 【今後の対応】面談時に、知識技能と思考力どちらに課題があるのかをはっきりさせ、知識技能強化系か思考力強化系かを考えさせて取り組ませる。
		【成果指標】 （２年生生徒） 着実に学力を向上させている。 （進研模試７月と１月の３教科総合偏差値の比較）	２年次に、学力を伸ばした生徒が Ａ　１６０人以上 Ｂ　１３０人以上 Ｃ　１３０人未満	【７月進研模試３教科総合での学力到達度（ＧＴＺ）】 ＜生徒：２年生＞ １３０人未満 Ｃ	【判断基準】１月の模試結果で判定する。 Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】学習時間の不足と学習習慣の定着していない。基礎基本を軽んじる生徒が多く、全体的な底上げが不十分である。 【改善策】　生徒自身に学習習慣や生活習慣を自己管理できるように促し、担任副担任が協働して Classi による学習記録の入力を徹底する。また、授業改善を進めるとともに、予習復習を徹底させる。

		【成果指標】 （２年生生徒） 着実に学力を向上させている。 （進研模試１月）	１月進研模試３教科総合で学力到達度（ＧＴＺ）のＳランクの生徒が Ａ　　３５人以上 Ｂ　　２５人以上 Ｃ　　２５人未満	【７月進研模試３教科総合での学力到達度（ＧＴＺ）】 ＜生徒：２年生＞ ２５人未満 Ｃ	【判断基準】１月の模試結果で判定する。 Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】主に文系で数学、理系で国語の成績を下げている。Ｓランクから下げた生徒が、ＡランクからＳランクへ上昇した生徒より多かった。 【改善策】読解力や思考力を向上できるように授業改善を進めるとともに、週末課題の工夫を行い、上位層への個別指導を行う。また、学部学科研究や学問研究を行い、志を高く持たせる。Ｓランクの生徒への指導を継続するとともに、Ａランクの生徒においても、個人面談を通してＳ難関や難関大学を目指させる助言等を行う。
		【成果指標】 （３年生生徒） 生徒個々の志望大学に合格している。 ＊スーパー難関大学とは、東大・京大・国公立大医学科を指す。	スーパー難関大学の合格者が Ａ　　５人以上 Ｂ　　３人以上 Ｃ　　３人未満 難関大学１０大学の合格者数が Ａ　　２５人以上 Ｂ　　２０人以上 Ｃ　　２０人未満 金沢大学の合格者数が Ａ　　３５人以上 Ｂ　　２５人以上 Ｃ　　２５人未満 国公立大学の合格者数が Ａ　１４０人以上 Ｂ　１２０人以上 Ｃ　１２０人未満	【７月進研模試５教科総合での学力到達度（GTZ)】 ＜生徒：３年生＞ スーパー難関大学 B 難関 10 大学　A 金沢大学　A 国公立大学　A	【判定基準】大学入試結果で判定する。 Ｃの場合は改善策を検討する。 【分析】7 月進研模試の結果（GTZ） 上位層は育ってきているものの、全体的に志望校のレベルには達していない。学習時間を十分とれていないことが要因だと考えられる。 【今後の対応】授業や教科面談を通して個に応じた学習方法や取り組むべき課題を具体的に確認し、着実に学力を伸ばす。GTZ の S 層と A 層の生徒については２次試験で配点が高い教科科目でしっかりと得点ができるよう意識させ、２次試験で必要な科目の学習に取り組ませる。B 層や C 層の生徒については共通テストでしっかりと得点できるよう意識させ、基礎基本事項の徹底を目標とした学習に取り組ませる。
学校関係者評価委員の評価		評価項目の一つに大学の合格実績があるが、高い学力を持った生徒が難関大学に進学を希望しない場合があるのではないか。その場合には正当な評価にならないことも考えられる。			
評価結果を踏まえた今後の改善方策		生徒の希望進路実現を最重視した指導を行っている。生徒一人一人の志望を叶えられるよう、より高い目標を掲げた進路指導を今後も継続する。			

３　教員の総合的な指導力の育成

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・生徒理解に努め、共感力と生徒支援力の向上を図るとともに、人間としての在り方・生き方を育む指導力を高める。 ・教職の専門性を基礎とし、教科指導力や学級経営力、危機管理力などの実践的な指導力の向上に努める。 ・校内でのＯＪＴによる若手研修を、中堅・ベテラン教員の経験を活かしながら効果的に進め、教職員全体の指導力向上を図る。 ・GIGA スクール構想の実現に向けて、教員の ICT 活用指導力を高めることによって生徒の	・スマートフォン、携帯電話等によるインターネットトラブル（いじめを含む）に関する校内講習会の実施と、新しいトラブル対策ための資料の作成と配付 ・生徒会によるネットトラブル防止啓発活動の企画・実施	【成果指標】 （生徒） スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する、安全・予防対策を実践している生徒の割合が高まっている。	スマートフォン等によるインターネットトラブルに対する安全・予防対策を、「十分に実践している」・「やや実践している」と答えた生徒の割合の合計が Ａ　９５％以上 Ｂ　９０％以上 Ｃ　８５％以上 Ｄ　８５％未満	【７月実施学校評価アンケート】 ＜生徒＞ ９０％以上 Ｂ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】昨年度の同時期より、１．２ポイント上昇した。都度の指導は実施していたが、スマートフォン等によるインターネットトラブルについて、校内講習会の時間を作り出すことが難しかった。 【今後の対応】後期は、デジタル資料を活用し、啓発活動を進め、ネットトラブル防止啓発活動に取り組んでいきたいと考えている。
	・「生徒による授業評価」の結果に基づく授業改善の推進 ・学習到達度に応じた予習・復習の取り組み方法の提示 ・Ｇｏｏｇｌｅ　ｃｌａｓｓｒｏｏｍを活用した復習内容の提示 ・予習チェックの呼びかけ ・「効果的な予習を促す」指導及び「多様な見方考え方が身につく」指導に関する教科内及び教科間での研究と情報共有 ・批判的思考力育成課題「知のよりみち」の更なる活用を図るために編集を工夫	【成果指標】 （生徒） 国語・数学・英語において「私は授業の準備をして授業に臨んでいる」と評価した生徒の割合が高まる。	国語・数学・英語における「私は授業の準備をして授業に臨んでいる」と評価した生徒の割合が Ａ　７０％以上 Ｂ　６５％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満	【７月実施第１回生徒による授業評価】 ６０％未満 Ｄ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】６０％を超えた教科は、英語のみであった。教員対象の学校評価アンケートにおいて、予習の確認を週１回以上行っている教員は６０．６％にとどまっており、粘り強い指導が必要である。 【改善策】予習（復習）の方法を丁寧に指導するとともに、授業担当者が予習（復習）内容を明確に提示したうえで次の授業で確認するという一連の流れが定着するよう、教科会議等で指導状況や課題について協議する場を設ける
		【成果指標】 （生徒） 「多様な見方考え方が身につく」と評価した生徒の割合が高まる。	「多様な見方考え方が身につく」と評価した生徒の割合が Ａ　６５％以上 Ｂ　６０％以上 Ｃ　５５％以上 Ｄ　５５％未満	【７月実施第１回生徒による授業評価】 ５５％以上 Ｃ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】教員対象の学校評価アンケートにおいても、思考力を高める課題を毎時間もしくは週ごとに出している教員は５９．６％にとどまっており、授業改善を更に進めていく必要がある。 【改善策】現在行っている互見授業の取組を更に活発化させるとともに、そこで得られた工夫や発見を教科会議等で共有することで教科を挙げての授業改善を推進する。
	学年・教科を主体としたＯＪＴによる若手教員育成を推進する。	【成果指標】 （若手教員） ＯＪＴをとおして教員としての成長を実感できる。	ＯＪＴにより「教員としての成長を実感できた」・「ややできた」と答えた若手教員の割合が、 Ａ　９５％以上 Ｂ　９０％以上 Ｃ　８５％以上 Ｄ　８５％未満	【７月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ ８５％未満 Ｄ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】同じ校務分掌が続いている教員を中心に、成長を実感できていない。一方、担任で持ち上がっている教員は成長を実感できている場合が多い。同じ業務であっても、創意工夫を図って、業務を進めることができれば達成感が得られると考えられる。 【改善策】同じ校務分掌が続いる場合、前年度と同じことの繰り返しではなく、ステップアップするような役割分担を主任が割り振ることで達成感を持たせるよう工夫する。また、新しい校務分掌についた人は、まだまだ不慣れな点も多いので、業務の意義やねらいを丁寧に説明しながら、評価していく必要がある。

学びの変容を促す。	情報課やICT支援員とも協力し、学校を挙げて GIGA スクール構想を推進する。	【成果指標】 （教員） Chromebook を活用して、生徒の主体的で深い学びを促すよう実践している。	「Chromebook を活用して、生徒の主体的で深い学びを促すよう実践している」に、「あてはまる」「ややあてはまる」と答えた教員の割合が、 A　７０％以上 B　６０％以上 C　５０％以上 D　５０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ ６０％以上 B	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】昨年度まではアンケート項目で「ICT 機器を活用して」となっていたが、今年度は「Chromebook 等の ICT 機器を活用して」と変更した。ICT 機器を普段から活用している教員が多いが、「あまりあてはまらない」という回答が多かった。 【今後の対応】引き続き情報課や実際に使っている教員の事例を紹介しつつ、教務課の互見授業や、生徒１人１台端末授業づくり推進事業の PT 教員による公開授業も活用し、Chromebook を活用した実践につなげる。
学校関係者評価委員の評価	様々な取組が行われる中で、それぞれに教員がねらいを持って指導していることを高く評価する。一生懸命に取り組み活躍している生徒が多い一方で、一部には不登校など思うように活動できない生徒もいるのではないか。				
評価結果を踏まえた今後の改善方策	不登校傾向の生徒は各学年に一定数いるが、担任・保護者・教育相談課が連携をとりながら組織的に対応している。必要な場合には外部機関にも協力を仰ぎながら、今後とも個々の生徒に応じた支援を行っていきたい。				

４　魅力ある学校づくり

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・特色ある教育活動（第５期 SSH 事業、NSH 事業）を全校的に推進し、その成果の全国的な普及に努める。また、その活動・成果を地域の小中学生に広報し、本校の魅力として伝える。	学校設定教科「探究」の成果物等の他校への普及	【成果指標】 本校の開発した教材を提供し、県内外の他校（中学校を含む）に成果の普及を図っている。	本校の開発教材を使用した学校数が A　２０校以上 B　１５校以上 C　１０校以上 D　　５校未満	【成果指標】 年度末に 集計・評価を行う	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】本校、ホームページからのダウンロードは着々と増えており、本校のこれまでの成果が、他校に広まっていることの表れと考えられる。
	物理チャレンジ、化学グランプリ、生物学オリンピック、数学オリンピック、全国総合文化祭等の全国規模の各種大会やコンテストへの出場者の育成	【成果指標】 （生徒） 全国大会相当への出場の決定数が増えている。	全国大会相当への出場が決定した個人またはグループ数が A　４以上 B　３ C　２ D　１以下	【成果指標】 ＜生徒＞ ２件 C	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】高校生バイオサミット決勝進出１件、物理チャレンジ決勝進出１件、他 SSH 全国生徒研究発表会でポスター発表賞受賞。 【改善策】課題研究などに関する全国大会につながる発表や数学オリンピックなどはこれから行われる。良い結果につながるよう指導していく。
	・英語に関するコンテスト（スピーチ、ディベート、エッセイ、暗唱、劇など）、弁論大会、その他課題研究コンテスト等への参加や応募の促進 ・進路達成を見据えた指導体制の構築	【成果指標】 （生徒） 左記の大会やコンテストに参加し、実績を上げている。	左記大会やコンテストに参加し A　優勝を含む入賞４件以上 B　入賞　３件 C　入賞　２件 D　入賞　２件未満	【成果指標】 ＜生徒＞ ２件未満 D	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】総文期間の出展のみの判定となるため、絶対数が少なかった。 【改善策】秋以降はビジネスプラングランプリをはじめとした、各種コンテストに作品を提出し改善につなげる。
	生徒の実用英語技能検定の取得数が、１年生は準２級以上、２年生は２級以上が増加すること。	【成果指標】 （生徒） 左記の検定合格者数が増加している。	左記検定における各級の合格者数が合計で A　９０人以上 B　８０人以上 C　７０人以上 D　７０人以下	【成果指標】 ＜生徒＞ 年度末に 集計・評価を行う	【判断基準】C、Dの場合は改善策を検討する。 【分析】２ 月に行われる年度内最終の英語検定までの結果で評価を行う。

学校関係者評価委員の評価	七尾高校では生徒の将来を見据えた指導を行っていることがよくわかる。生徒が自らの人生を切り拓いていくためには「やり抜く力」が必要である。そうした力を身に付けるための経験を高校時代にさせてほしい。
評価結果を踏まえた今後の改善方策	ＳＳＨが中心に進めている「探究」では、思い通りに進むことはまれである。生徒は、何度も失敗や挫折を経験しながらチャレンジしている。そのことが「やり抜く力」を育み、人生を切り拓いていく力になると考えている。

５　働き方改革の推進

重点目標	具体的取り組み	評価の観点	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度の扱い（改善策等）
・教職員は、ワークライフバランスやタイムマネジメントを意識しながら不断に業務改善を進め、教育活動の質的向上に努める。	・月２回の定時退校日と８月の閉校日を設ける。 ・最終退校時刻を意識して計画的に業務に取り組む。 ・長期休業中にまとまった休暇を取得する。 ・年休を計画的に取得する。 ・会議のペーパーレス化をさらに進めるとともに、効率的・効果的な会議運営を行う。 ・情報共有の仕方を工夫し、職員朝礼を原則として週に１回とする。 ・業務の平準化を図り、分業と協業の体制をつくる。 ・部活動の休養日を適切にとる。	【成果指標】 （教員） 業務の工夫・改善により効率化を図る。	業務の工夫・改善により効率化を「図ることができた」・「やや図ることができた」と答えた教員の割合が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満	【７月実施学校評価アンケート】 ＜教員＞ ７０％未満 Ｄ	【判断基準】Ｃ、Ｄの場合は改善策を検討する。 【分析】ホーム担任や新しい業務を担当する教員に「あまりあてはまらない」という回答が多かった。さらに「あてはまらない」と回答したのは全てホーム担任だった。 慣れない環境下で、業務をこなしている様子がうかがえる。 【改善策】学年主任を中心として、一年間の活動のねらいと内容を把握したうえで、担任業務を今一度精査し、ICT 機器等を活用し、省力化を図るとともに、各課においても同様の取組を促す。
学校関係者評価委員の評価	多種多様な学校行事や取組で成果をあげているが、そのことが多忙化を招いているという側面もあるのではないか。それぞれに優先順位を付けて業務の精選を考えてもらいたい。				
評価結果を踏まえた今後の改善方策	業務の効率化をさらに進めるとともに、職員の働き方改革と、生徒の学力保障を両立させるための工夫を図る。				